

令和6年度北海道大学インターンシップを実施
株式会社HBAと「地域創成ワークショップ」を実施
知床・斜里町×北大まると交流祭を開催

お知らせ

・医療費通知事業の実施



全学ニュース

- 1 令和6年度北海道大学インターンシップを実施
- 2 令和6年度Integrated Science Program (ISP) 入学式を挙
- 3 寶金総長がボゴール農業大学創立61周年記念イベントで講演
- 4 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 7 令和6年度技術職員の体験型英語研修を開催
- 8 そらちしんきん夏休みワークショップで「Seeds of Innovation」を実施
- 9 株式会社HBAと「地域創生ワークショップ」を実施
- 10 北大発認定スタートアップ企業Floatmeal株式会社の北村もあな氏と工学院博士後期課程の牧 駿さんが第9回NoMaps Dream Pitchにて「最優秀賞」と「NICT賞」を受賞
- 11 メルボルン大学の新研究担当理事一行11名が本学を訪問
- 12 官学連携プログラム「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催
- 13 「北海道大学×HBC SDGs大学 in JTの森 積丹 ～育つ森の不思議～」を開催
- 14 NoMaps 2024「WELLNESS」に参加
- 15 札幌市苗穂・本町地区センターと共催で「MIND食ランチョンセミナー」を実施
- 16 雨龍研究林と札幌キャンパスがOECM国際データベースに登録
- 17 「さっぽろレインボープライド2024」パレードに参加
- 18 知床・斜里町×北大まると交流祭を開催

部局ニュース

- 19 公共政策大学院が米国大使館助成プログラム「日米外交アカデミー」を開催
- 20 医学研究院医理工学グローバルセンターが国際シンポジウム「The 11th GCB Biomedical Science and Engineering Symposium」を開催
- 21 医学部・歯学部合同慰霊式を挙
- 22 歯学部で台北医学大学歯学部生との交換留学を実施
- 23 工学部が創立100周年記念事業を挙
- 26 農学部において第41回 あぐり大学「わたしたちのくらしと酵（こう）素」を開催
- 27 地球環境科学研究院が令和6年度公開講座「生物学の技術と挑戦：環境問題の解決への糸口」を実施



そらちしんきん夏休みワークショップで「Seeds of Innovation」を実施



メルボルン大学の新研究担当理事一行11名の来訪



令和6年度Integrated Science Program (ISP) 入学式を挙



寶金総長がボゴール農業大学創立61周年記念イベントで講演

- 28 北海道大学研究集会2024「言語教育におけるAI活用の展望と教師の果たす役割－AIにできること、できないこと」を開催
- 29 メディア・コミュニケーション研究院で「北海道におけるロシア語教育」研究会を開催
- 30 遺伝子病制御研究所に宇宙航空研究開発機構（JAXA）の大西卓哉宇宙飛行士が来訪
- 31 遺伝子病制御研究所が動物慰霊式を挙
- 32 日・ザンビア外交関係樹立60周年記念 人獣共通感染症対策のためのOne Health特別シンポジウムを開催
- 33 第46回なよろ産業まつりへ参加
- 34 北極域研究センターが国立大学附置研究所・センター会議 第1部会シンポジウムを開催

お知らせ

- 35 医療費通知事業の実施

博士学位記授与 36

レクリエーション

- 45 令和6年度教職員テニス大会の開催
- 47 令和6年度学内教職員フットサル大会の開催

研修

- 48 令和6年度法人文書管理に関する研修
- 48 令和6年度北海道地区国立大学法人等中堅職員研修
- 49 令和6年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修

表敬訪問 50

人事 51

- 52 再任部局長紹介
- 52 新任部課長等紹介
- 53 新任教授紹介

訃報

- 54 医学研究院 准教授 倉島 庸 氏
- 54 名誉教授 越野 武 氏



そらちしんきん夏休みワークショップで「Seeds of Innovation」を実施



メルボルン大学の新研究担当理事一行11名の来訪



官学連携プログラム「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催



札幌市苗穂・本町地区センターと共催で「MIND食ランチョンセミナー」を実施

表紙：知床・斜里町×北大まると交流祭を開催（関連記事18頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景㊦ 桑園学寮記念碑（北8条西9丁目）

■全学ニュース

令和6年度北海道大学インターンシップを実施

9月2日（月）から9月6日（金）、本学の学生を対象とした、令和6年度北海道大学インターンシップを実施しました。

本インターンシップは、平成22年度から、学生に就業体験の機会を与えることにより、職業意識の育成・向上に寄与し、併せて本学に対する理解を深めることを目的として実施しています。今年度は7名の学生を対象として、実施しました。（別表参照）

初日に、開講式及び全体オリエンテ

ーションを実施し、各部局担当者から「組織運営」「財務」「学務」「研究推進」「施設」「国際」「社会共創」「図書」の8つのテーマに基づき、本学の概要説明がなされ、その後、受入部局でそれぞれ実習を行いました。

学生は実習を通して、学びたいことを明確にし、不明な点が生じた際は、積極的に質問するなど、非常に熱心に取り組んでいました。学生からは「普段の働き方や、職場の雰囲気を知ることができ、将来就職する際のイメージ

を掴むことができた」などの感想が寄せられ、実際に大学職員として働くイメージを実感するきっかけとなり、有意義な実習となったようでした。

今後もインターンシップを通して本学の魅力を発信し、多くの学生に就職先の1つとして本学職員を選択してもらえるよう、取り組みを続けていきます。

（総務企画部人事課）



全体オリエンテーションの様子



実習に取り組む様子



実習の成果を発表する様子

受入部局	受入開始日－ 終了日 【実働日数】	実習生	
		所属	学年
総務企画部	令和6年9月2日(月)－ 令和6年9月6日(金) 【5日】	国際広報メディア・ 観光学院	修士1年生
財務部		文学部	3年生
学務部		文学部	3年生
研究推進部		理学部	2年生
		文学部	2年生
社会共創部		法学部	3年生
附属図書館		文学部	3年生

（別表）

令和6年度Integrated Science Program (ISP) 入学式を挙行

外国人留学生を対象とした理系の学士課程・修士課程プログラムである「Integrated Science Program (以下、ISP)」の入学式を9月25日(水)に理学部で行い、当該プログラムの第8期生となる8名(6ヶ国)が学士課程に入学しました。

ISPは国際社会で活躍できる人材の育成を目的としており、学士課程では入学後、最初の半年間で理系分野を始めとする幅広い基礎知識を身につけ、その後、理学部(物理学科・化学科・生物科学科生物学専修分野)に移行して、専門教育を受けることとなってい

ます。

入学式は、ISPプログラム長の山本文彦理事・副学長、副プログラム長の鈴木久男教授、理学部長の網塚 浩教授、理学部物理学科の岡本 崇教授、化学科の松井雅樹教授、生物科学科の柘原 宏教授が参列し、緊張の中にも和やかな雰囲気で行われました。最初に、山本プログラム長が祝辞を述べ、本学の学生として一步を踏み出したISP第8期生達に歓迎の意を表しました。

続いて、ISPコーディネーターの瀬戸 治准教授による新入生の紹介が行

われ、フィリピン出身のディゾン・ジョン・フロレンス・アヴィレスさんが代表して宣誓を行いました。

最後に、ISP教員や先輩学生も交えて、列席者全員で記念撮影が行われました。

入学式終了後は、同会場にて理学部主催の新入生ガイダンスが開催され、各学科の紹介を中心とした興味深い内容に新入生達は熱心に聞き入っていました。

(学務部教育推進課)



プログラム長の山本理事・副学長からの祝辞



新入生代表宣誓



記念撮影

寶金総長がボゴール農業大学創立61周年記念イベントで講演

9月2日（月）、大学間交流協定校であるボゴール農業大学からの招待を受け、インドネシア・ボゴールで行われた同大学創立61周年記念イベントにおいて、寶金清博総長が“Society 5.0 and the Future of Higher Education”をテーマに講演を行いました。本イベントには、同大学のアリフ・サトリア学

長をはじめとする教員や学生及び、在インドネシア日本国大使館や他大学、産業界からも多くのゲストが出席しました。

講演後、寶金総長は同大学のアグリビジネス&テクノロジーパークやサイエンス&テクノパークなどの研究施設を視察し、同大学の最新の研究施設に

ついて理解を深めました。また、キャンパス内に設置されている本学農学研究院のフロントオフィスを訪見し、学生やスタッフと交流を行いました。

（国際部国際連携課）



寶金総長による講演



アグリビジネス&テクノロジーパークの視察



フロントオフィスの訪問

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をするとしています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	(8月31日現在)	50,514件	7,395,910,745円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	(8月31日現在)	13,466件	1,231,142,188円

ご寄附状況

8月は823件116,266,165円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。
(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名（法人等）

アイエヌオー株式会社、医療法人社団青柳皮膚科医院、株式会社石本建築事務所札幌オフィス、株式会社エース、
医療法人社団越前谷脳神経クリニック、株式会社北のたまゆら、一般財団法人協済会、株式会社クレタ、ケント・ハウス株式会社、
工学部精密工学科5期生、医療法人宏友会、国土防災技術株式会社、医療法人社団こくぶクリニック皮膚科形成外科、
医療法人社団国穂会新宿イーストサイドたけうち内科、医療法人社団小林皮膚科クリニック、医療法人社団札幌はるか会、
株式会社札幌病理検査センター、株式会社須田電気工事、医療法人スワンアイクリニック、株式会社竹山、ダビスタ株式会社、
株式会社土屋ホームトピア、株式会社つば八、有限会社道都デンタル・ラボ、ドリーミン・ベル、西さっぽろ皮フ科・アレルギー科、
西宮の沢整形外科、日本防水総業株式会社、日本ライフライン株式会社、株式会社農土コンサル、株式会社バルカー、
株式会社北海道技術コンサルタント、株式会社マイ・アール保険調剤いちご薬局、株式会社丸井足立、医療法人社団緑生会

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	青柳 良隆	赤平 幸郎	浅木 栄子	東 剛己	渥海 航
阿部 啓子	阿部 竜彦	阿部 雅史	阿部 芳久	有村 直子	飯島 尚	池澤 靖元	池田 正樹
池田 梨子	石井 浩二	石井 翼	石井 哲夫	石垣 隆弘	石川 直敬	石栗 秀	石田 克平
石山 達雄	磯田 滋文	市坂 有基	伊藤 献一	伊藤 大貴	伊藤 宏	伊藤 雄三	井上 将希
井上 玲	猪熊 大輔	猪股 路子	井原 博	今井 晋	今井 久雄	今川 一兵	入澤 秀次
岩崎 哲也	岩代 望	上田 佳代	上田 雅敏	上原 優	宇佐美礼子	白渕 浩明	梅本 由佳
浦木健太郎	蝦名 康彦	縁記 和也	遠藤 公憲	大久保 智	大崎 智史	大島 京子	大島 浩幸
太田 哲司	大原 正範	岡崎 駿志	小笠原一誠	岡田 英子	岡田きょう子	沖崎 遼	奥原 宏治
小熊 祐子	奥村 和久	小倉 崇恵	小田原一史	小沼 尚則	小沼帆乃佳	小野里典明	小野寺 茂
小原 大和	嘉島 相裕	片山 琢	加藤 駿	加藤 伸康	加藤 弘明	加藤 裕貴	金古 裕之
兼古 学	金川 眞行	兼子 稔浩	梶島 孝典	加部 一彦	川口 政史	川瀬 紀子	川田 将也
河淵 則良	河本 充司	菅野 彰一	菊地 竜也	岸本 佳則	木滝 俊郎	北林 俊憲	衣川 暢子
木村 孔一	木山 邦樹	工藤 俊哉	倉元 祥伍	栗原 誠治	上月 浩	越澤 勝	小柴 正則
小瀬村貴敏	小瀧 安史	小林 賢人	小林 清一	小林 正樹	小林 幸博	小向 志保	齊藤 晋

齋藤 崇宏	齋藤 久	境 政人	坂本 大介	坂本 史子	崎元 大志	佐藤 孝大	佐藤 俊二
佐藤 隆博	佐藤 巧也	佐藤 俊則	佐藤 敏文	佐藤 雅子	佐藤 康訓	佐藤 祐麻	三升畑元基
塩野 恒夫	塩満 正哉	塩見 祐子	重井 真琴	志済 聡子	柴 泰純	島本 則道	白井 真也
白鳥 貴久	新宮 康栄	新保 大輔	菅原 新也	杉江 和男	杉田 弘也	杉本 聡	鈴木 貴之
鈴木 正宣	須藤 幸雄	清野美恵子	関根 猛	瀬戸山洋介	瀬名波栄潤	瀬山 邦明	高木 正和
高木 桃恵	高瀬登志彦	高橋 彩	高橋さおり	高橋 誠	高橋 裕介	高久 聡	高柳 涼
高山 岩男	田川 愛	田栗 和奈	竹内 信彦	竹内 幹也	武越 靖郎	竹林 徹郎	竹村 勉
竹藪 公洋	田代理枝子	伊達 正文	田中 佐織	田中 紀子	田畑 太	玉槻 大輔	辻井 正人
辻 悦司	辻 康介	辻 英幸	辻脇 真澄	土家 琢磨	寺江 聡	寺澤 陸	徳田 耕一
戸田 智弘	外木 秀文	飛澤由紀子	富岡 智	豊田 威信	中尾 紀子	中村 公也	中村 景子
中村 文隆	鍋島 龍一	成田 吉弘	西海 真一	西川 和子	西野 美芳	庭野 陽樹	根来 清文
根本 治	根本 叔治	野路 武寛	蓮池 清美	長谷 成人	長谷山美紀	長谷龍之介	花井 啓治
花田 秀一	浜坂 幸吉	林崎 弥生	林 和広	林 達也	林 将人	原 啓介	原田 正平
原田 浩	檜佐 彰一	樋田 泰浩	日比 幸人	平岡 圭	廣崎 芳次	廣重 勝彦	吹野 信
福田 正晴	福永 悟郎	藤枝 俊儀	藤澤 裕子	藤田 芳康	船津 明	古川聖太郎	古川夕里香
古木 誠人	古田 恵	別役 徹生	細川 威樹	本郷 紀沖	本田 孝雄	町田 泰一	松井 耕二
松井 新	松原 謙一	松本 篤二	松本 佳子	的場光太郎	眞野 茂樹	三浦 正次	三木 證永
水嶋 祐治	水谷 祐輔	溝江 純悦	水上 尚典	湊 博之	南田 大朗	宮武 司	宮田 信幸
村上 広輝	村川 力彦	村瀬徳啓充	村瀬 亮太	村田 寛菜	室津 久子	森永 大亮	安陵 智代
保田 晋助	柳谷 憲治	矢部 一郎	山口 淳二	山下 裕久	山田 真司	山中 啓明	山本 広美
山本 睦生	結城美智子	劉 柱亨	横内 葉子	余湖 兼右	横山 和之	横山 考	吉木 咲枝
吉田 幸治	吉田 広志	米田 穰	若狭 哲	渡辺 精一	渡邊 祐介	渡邊 裕	渡部 要一
渡部 克将							

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

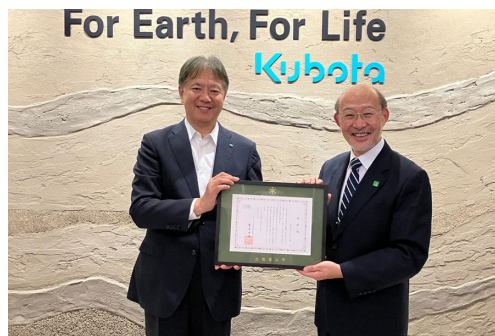
既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）

<感謝状の贈呈>



株式会社中村プロモーション様（令和6年8月6日）



株式会社クボタ様（令和6年8月22日）



山田 豊様（令和6年8月6日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

（社会共創部広報課）

令和6年度技術職員の体験型英語研修を開催

9月19日（木）及び20日（金）に「令和6年度技術職員の体験型英語研修」をZoomによるオンライン形式で開催しました。（研修実施スタッフ：佐藤浩幸、高塚 徹、石川 晋、阿部 歩、増茂弘規）

体験型英語研修は本学の国際化への対応並びに技術職員のスキルアップ及び資質向上の観点から、技術職員の英語対応力を向上させ、本学の教育研究支援機能の強化を図ることを目的とし、技術支援本部運営調整会議スタッフ・ディベロップメント実施専門部会スキルアップ検討チーム及び技術支援・設備共用コアステーション研究支援人材育成プログラムマルチスキル人材育成プロジェクトの合同事業として行いました。

名古屋大学博物館特任助教の梅村綾子氏を講師として迎え、実際の業務で英語を使用する場面を想定した実践的・体験的なスピーキングのプログラムで、AコースとBコースの2つに分け

て実施しました。Aコースのロールプレイングでは1名が技術職員役、もう1名が留学生役となり、技術職員役は、実際に業務で使用している資料（例：担当装置に関する日本語の取扱説明書）の内容を相手に英語で伝える練習を行い、留学生役は、技術職員役の説明に対して英語で質問し、終了後に技術職員役の話したことをまとめて英語で説明するという内容で、研修中は基本的に全て英語で会話することを目標としました。

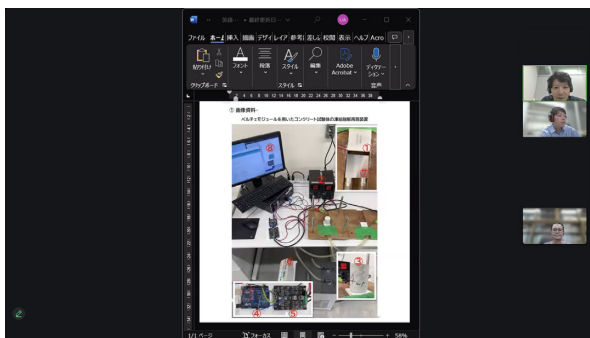
また、BコースではKYT（危険予知訓練）の画像を利用し、指摘・提案・意見の述べ方を学び、指摘・提案の仕方などのレクチャーを受けた後、実践としてKYTの画像（実験等の絵や写真）を見ながら作業に潜む危険を英語で指摘し、改善策の提案をした後、指摘箇所について自分の意見を英語で述べる練習を行いました。

研修を終えた受講者からは、「講師も受講者も話しやすい雰囲気で、リス

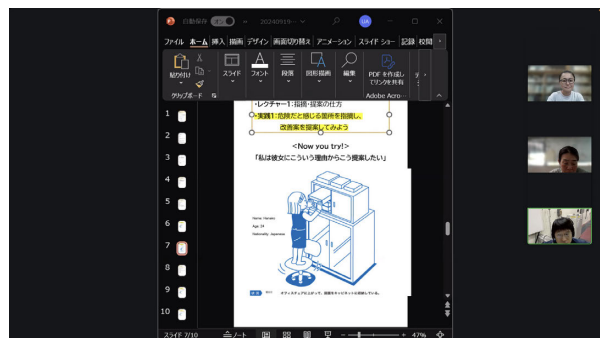
ニング、スピーキングの良い練習になった（Aコース）」「講師の説明で、自分が話すときに何を間違っているのかが分かり、気を付けるポイントが学べてよかった（Aコース）」「日本語のニュアンスを英語でどう伝えるか、様々な言い回しがあることを知り、勉強になった（Bコース）」、「『S+V』や『S+V+O』などの文の作り方を思い出せたので、長い文章で喋れなくても、これらを意識して英語を話そうと思った（Bコース）」などの感想が寄せられました。今回の体験型英語研修が、受講者の今後の業務に活かされていくことが期待されます。

また、研修実施スタッフからは、昨年の体験型英語研修実施経験を活かして準備したことで、昨年度に比べ、より良い研修になったという感想が聞かれました。今後も技術職員の要望に沿った研修を実施していきます。

（技術支援本部）



オンラインによるロールプレイングの様子



オンラインによるKYT（危険予知訓練）の画像を利用した、指摘・提案・意見の述べ方の練習

そらちしんきん夏休みワークショップで「Seeds of Innovation」を実施

8月20日（火）に空知信用金庫本店にて、中高生向けイベント「そらちしんきん夏休みワークショップ～住みよい地域にするための次世代による作戦会議～」を開催し、カードゲーム型課題解決プログラム「Seeds of Innovation」を実施しました。本プログラムは産学・地域協働推進機構が考案したアントレプレナーシップを養うためのプログラムで、身近な社会課題の解決策となるアイデアを出し、他者と意見交換をしながら起業やビジネスを学ぶことができる内容となっています。

本イベントには、岩見沢市内の中学生・高校生14名が参加し、4チームに分かれて北海道地域の「観光」「農業」

に関する課題や、岩見沢市の「和菓子のPR」「積雪問題」など市独自の課題を取り上げ、その解決策となるアイデアを考えました。チーム内で、「冬に除雪がされずに通学が大変だ」「岩見沢市の野菜と他の地域の野菜の違いは何か」など課題を掘り下げて意見交換をした後に、「ロボット」「SNS」「料理」など様々な単語が記載されたアイデアのもととなる「シードカード」を使って、解決策となるアイデアを出し合いました。最後に各チームの発表を行い、会場に集まった関係者らが良いと思ったアイデアに疑似マネーを投資し、最も多く投資を集めた優勝チームは、本物の一億円の現金を手

持つという貴重なチャンスを獲得し記念写真撮影も行いました。

参加した学生からは「年齢の異なる人とビジネスに関して色々な意見交換ができて良かった」「起業が身近に感じられた」「人と話すことで自分のアイデアがより良いものになると体験できて良かった」などの感想が寄せられました。

今後もアントレプレナーシップの涵養に向けて、起業やビジネスについて学ぶプログラムなど様々な教育を提供していきます。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

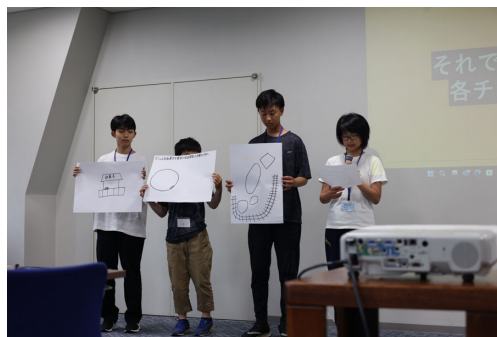
日 時：8月20日（火）13：30～16：00

場 所：空知信用金庫本店（岩見沢市）

参加者：中学生・高校生14名



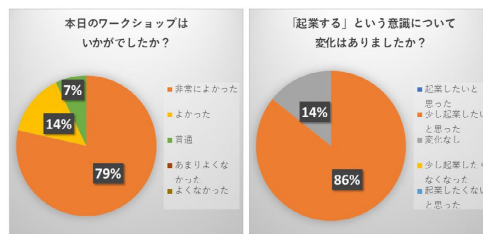
ワークショップの様子



考えたアイデアを発表



一億円をもって記念撮影



参加者アンケート結果

株式会社HBAと「地域創生ワークショップ」を実施

9月2日（月）に産学・地域協働推進機構は、株式会社HBAの協力のもと、高校生・大学生・大学院生・教育関係者向けの「地域創生ワークショップ」を実施しました。

本イベントは、株式会社HBAがワーケーションを推進している「鹿追町」における地域課題の解決アイデアをチームで考えるワークショップです。「空き家対策」「若者世代の人口流出」「観光需要の季節変動」を鹿追町の重要課題とし、これらの課題において問題を抱えているのは誰か、ボトル

ネックはどこにあるかをチーム内で意見交換し、その解決策を考えました。

参加者からは、「然別湖観光に合わせ空き家を活用して宿泊施設や飲食店を新設する等の市街地の再開発」「鹿追町の豊かな自然を生かし結婚式等の会場として使用するウェディング事業」「宇宙について学べる施設の設置」など地域課題の解決に繋がる様々なアイデアが提案されました。

最後に、株式会社HBA経営企画本部の高野 達副本部長、鹿追町役場企画課企画係の迫田明巳係長、株式会社北

海道博報堂ビジネスデザイン局の南大介局長から、参加者のアイデアや発表に対してフィードバックをいただきました。

産学・地域協働推進機構では今後も、産業界や地域と積極的に連携してイベント等を開催し、学生がアントレプレナーシップを学ぶ機会を提供していきます。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

日 時：9月2日（月）16：00～18：00

場 所：オープンイノベーションハブエンレイソウ

参加者：高校生、大学生、大学院生、教育機関の関係者（約50名）

協 力：株式会社HBA



課題解決アイデアを考察する様子



英語でのディスカッション



鹿追町迫田係長からのご講評

北大発認定スタートアップ企業Floatmeal株式会社の北村もあな氏と 工学院博士後期課程の牧 駿さんが第9回NoMaps Dream Pitchにて 「最優秀賞」と「NICT賞」を受賞

9月11日（水）に札幌市内のACU-Aにて開催された「第9回 NoMaps Dream Pitch」のピッチコンテストにおいて、北大発認定スタートアップ企業であるFloatmeal株式会社の北村もあな代表取締役が「最優秀賞」と「野村證券札幌支店賞」を、工学院博士後期課程の牧 駿さんが「NICT賞」と「審査員特別賞」をそれぞれ受賞しました。

北村氏は「高タンパク植物ウキサの量産化で食料安全保障と気候変動に挑む」というテーマで発表を行い、最優秀賞を受賞し、EZOHUB TOKYO

や社交場ヤングのコワーキングスペース利用権、さらには国際スタートアップカンファレンスHIW（Hokkaido Innovation Week）への参加権を獲得しました。北村氏は、今回獲得した権利を活用し、東京と札幌においてネットワークを強化し、ビジネスのさらなる拡大を目指すと言っていました。

一方、NICT賞を受賞した牧さんは「Real Touch〜力触覚で誰でも簡単操作！汎用ロボットが変える水産業」というテーマでピッチを行い、副賞として来年3月に開催される起業家甲子園

への北海道代表としての出場権を獲得し、全国大会への意欲を示しました。

ピッチコンテストの後には交流会が行われ、本機構スタートアップ創出本部の土屋 努本部長による乾杯の挨拶を皮切りに、観覧者と登壇者の間で質問や名刺交換が活発に行われ、次のビジネスチャンスへと繋がるネットワークが多く築かれた様子でした。

（産学・地域協働推進機構）



Floatmeal株式会社の北村代表取締役（左）
工学院博士後期課程の牧さん（右）



土屋本部長による乾杯の挨拶

メルボルン大学の新研究担当理事一行11名が本学を訪問

9月19日（木）、20日（金）に、戦略的国際研究パートナーであるメルボルン大学のマーク・キャンディ新研究担当理事が本学を来訪しました。キャンディ理事は自身が同大学の工学・情報技術研究院長であった令和4年にも、ダンカン・マスケル学長一行の来札に帯同しています。今回は、医学・歯学・保健科学研究院のジェニー・ウィルキンソン＝ベルカ生体医科学院長、ピーター・チュン准研究院長（イノベーション・産業担当）、ブルース・トンブソン保健科学院長、工学・情報技術研究院のベン・ルビンスタイン副研究院長、マジッド・サーヴィ教授、理学研究院のアンディ・マーティン准研究院長、ジェイムズ・ハッチソン上級講師、アンドリュー・ウールナフ研究・イノベーション・商業化副部長（企業連携担当）、マリア・ロイトマン国際研究戦略主任アドバイザー、ウェイルン・ニエン研究戦略事業オフィサーの計11名での来訪となりました。同大学執行部の来訪は、令和4年夏の学長来訪を皮切りに、同年冬の総長訪問、同5年夏の国際担当及び先住民担当理事の来訪、同6年夏の先住民担当理事の

再訪と折々で行われ、両大学執行部の信頼関係の醸成に繋がっています。

本来訪は、令和4年度から15の研究ワークショップを支援してきた両大学共同出資の「北海道大学・メルボルン大学合同研究ワークショップスファンド」の今後2年の更新と、令和6年10月1日から本学情報科学院生体情報工学コースと、メルボルン大学理学院化学部門のナノマテリアル研究で2名の博士課程学生を受け入れて始まるJoint PhD（日本の博士課程デュアルディグリーを指す）連携が主眼であり、寶金清博総長や関係部局教職員が見守る中、瀬戸口剛理事（研究担当）・副学長、高橋 彩理事（国際担当）・副学長とそれぞれ合意書が締結されました。日本の大学で初めてメルボルン大学とJoint PhDの全学包括合意書を締結したことにより、今後両大学の全ての大学院博士課程でデュアルディグリープログラムを計画できるようになります。

北海道ワイン教育研究センターを用いて開催された式典では、令和4年及び同5年に採択された研究ワークショップのうち、工学研究院の大橋俊朗教授（機械薬理学）、保健科学研究院の澤

村大輔教授（異職種連携型高齢者医療）、スラブ・ユーラシア研究センターの岩下明裕教授（変わりゆく情勢におけるスラブ研究資料の共有）、北方生物圏フィールド科学センターの後藤貴文教授（持続可能な畜産生産）からその後の教育研究連携の発展が共有され、メルボルン大学理学研究院のハッチソン上級講師より、本学電子科学研究所の雲林院宏教授との研究連携がJoint PhDに繋がったことが説明されました。両大学のワイン連携の可能性を感じさせる、北大産シードルとワイン、メルボルン大学ドゥーキーキャンパス産のワインのテイスティングも行われ、和やかに式が終了しました。

来訪者一行は、その後、スマート農業研究教育センター、人獣共通感染症国際共同研究所、工学研究院、エネルギー・マテリアル融合領域研究センター、情報科学研究院、医学研究院、陽子線治療センターを訪問し、この3年間の複数分野の新規研究連携を振り返るだけでなく、次の数年の種を見つける機会となりました。

（国際連携推進本部）



式典の参加者



Joint PhD包括合意と両大学の指導教員たち



ワークショップスファンドの2年延長



歓迎夕食会

官学連携プログラム 「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催

サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門は、札幌市、上川郡下川町、法政大学及び関西大学と連携し、8月28日（水）、9月4日（水）から6日（金）及び9月17日（火）に、官学連携プログラム「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を実施しました。法政大学、関西大学及び本学から学部生と大学院生合わせて30名（うち本学の学生は6名）が参加し、オンライン等での学習のほか、札幌市や下川町でのフィールドワークを行いました。

参加した学生には、法政大学デザイン工学部の川久保俊教授のオンデマンド教材の受講及び国土交通省の資料が事前学習として課されました。

8月28日（水）は、オンラインで、法政大学生命科学部の渡邊雄二郎教授、東京ガスエンジニアリングソリューションズ株式会社及び株式会社関西の各担当者によるカーボンニュートラルへの取り組みについての講義を受けました。その後、学生らは各グループに分

かれてグループディスカッションを行いました。

9月4日（水）は、参加者は札幌市で北海道ガス株式会社札幌発電所及び株式会社北海道熱供給公社中央エネルギーセンターを訪れ、施設見学と脱炭素に向けた同社の取り組みについての講義を受けました。その後、総合博物館に移動し、札幌市環境局環境都市推進部環境政策担当の長尾和俊係長による、札幌市の脱炭素化に向けた取り組みについての講義を受けました。

9月5日（木）は、下川町に移動し、田村泰司町長の歓迎を受けた後、SDGs推進戦略室の箕島 豪室長と、総務企画課の山本敏夫課長による、SDGs未来都市とゼロカーボンシティについての講義を受け、グループワークに臨みました。その後、下川町内を見学し、同町に宿泊しました。

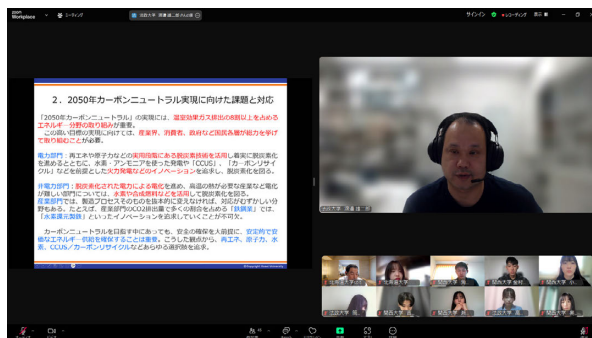
9月6日（金）は、下川町森林組合北町工場を訪問し、製炭窯や小径木加工施設等を見学、木材の商品化について

学んだ後、トドマツが原料のエッセンシャルオイル及び芳香蒸留水を製造しているフブの森のプラントを見学しました。続いて、木質原料製造施設を訪問し、燃料用チップの生産工程を見学した後、最後に一の橋バイオビレッジに移動し、木質バイオマスによる熱供給施設を中心としたまちづくりを見学しました。

9月17日（火）は、オンラインでグループワークを行い、行政、エネルギー供給事業者、エネルギー活用事業者、生活者の視点から、カーボンニュートラル実現に向けたトランジションについての発表会を行いました。

サステナビリティ推進機構はこれからも、各地域や国公私立を問わず各大学等と連携し、「カーボンニュートラル」の実現に繋がる教育・研究の取組・発信を進めていきます。

（サステナビリティ推進機構）



オンラインでの事前学習の様子



総合博物館での札幌市による講義の様子



下川町役場での講義の様子



下川町森林組合北町工場での見学の様子

「北海道大学×HBC SDGs大学 in JTの森 積丹 ～育つ森の不思議～」を開催

サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門は、北海道放送株式会社（以下、HBC）と連携し、8月31日（土）に「北海道大学×HBC SDGs大学 in JTの森 積丹 ～育つ森の不思議～」を実施しました。4回目の開催となった今回は、抽選で選ばれた29名が参加しました。

午前8時にHBC本社1階ロビーに集合した参加者は、チャーターバスで約1時間半かけて、札幌市から積丹町に移動しました。この日は生憎の雨模様のために当初予定していたプログラムを変更し、はじめに積丹町総合文化センターで日本たばこ産業株式会社（JT）北海道支社の辻恵里那氏から、JTの森 積丹の歴史や活動について、積丹町役場農林水産課の成田守寿総括主査から

は森の管理について解説が行われました。続いて北方生物圏フィールド科学センター（以下、FSC）の吉田俊也教授の解説によって、JTの森 積丹は人工林と天然林が混ざった森林であり、人工林は主に針葉樹、天然林は主に広葉樹で構成されていることなど、森の特徴について詳しく学びました。

その後、天候が回復してきたことから、積丹町役場から約5キロ離れた美国地区のJTの森 積丹に移動し、参加者は吉田教授のほか、サポートスタッフとして同行したFSCの奥山智浩技術専門職員、伊藤悠也技術専門職員及び環境科学院博士後期課程の学生とともに、約1キロを散策しながら、森の木々や植生を観察したほか、成長錐というT字型の道具を使い年輪のサンプルを

抽出して、樹齢の計測体験やカラマツの木の伐採作業を見学しました。

散策後は総合文化センターに戻り昼食をとった後、午前中の森での体験についての質疑応答が行われ、最後に参加記念として、JT北海道支社よりJTの森の間伐材で作られた「SDGsバッジ」が配付され、札幌市への帰路につきました。

サステナビリティ推進機構は、今後も学外のステークホルダーと連携し、「持続可能な社会」の実現につながる教育・研究の取組・発信を更に進めていきます。

（サステナビリティ推進機構）

概要

名 称：北海道 to the future プロジェクト presents 「北海道大学×HBC SDGs大学 in JTの森 積丹～育つ森の不思議～」
 講 師：吉田俊也（北方生物圏フィールド科学センター教授）
 ナビゲーター：森結有花（HBCアナウンサー）
 日 程：2024年8月31日（土）
 参加対象：小学5年生以上
 参 加 料：無料
 主 催：北海道放送株式会社（HBC）
 特別協力：サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門
 協 賛：日本たばこ産業北海道支社（JT）
 後 援：積丹町



座学で学ぶ参加者



森での体験プログラムの様子



樹齢について解説する吉田教授（左から2人目）と伊藤技術専門職員（左端）

NoMaps 2024「WELLNESS」に参加

サステナビリティ推進機構は、9月13日（金）から9月15日（日）に開催されたNoMaps^{*1}の「WELLNESS」に参加しました。

NoMaps 2024「WELLNESS」は、「めんどくさいから、始めよう」をテーマに開催され、保健科学研究院及び北海道大学病院の協力の下、札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）にブースを出展しました。

ブースでは、保健科学研究院の研究紹介、本学の「SDG3『すべての人に健康と福祉を』』に関連してインターネットで公開している講義動画の紹介及び

北海道大学病院栄養管理部が推奨する「MIND食」紹介の各パネル展示を行いました。また、同部が作成した「おいしい！北大病院レシピ」の動画を流したほか、産官学で推進するプロジェクト「H-ARTs^{*2}」が実施しているイベント「無料で健康チェック！」紹介の一環で「脳年齢測定」を実施しました。3日間の開催で、約500名が本学のブースで脳年齢測定を体験しました。

サステナビリティ推進機構は、これからも産学官の様々なステークホルダーと連携し、本学の教育・研究の取組・発信を更に進めていきます。

^{*1} NoMapsは、平成28年から「ALL HOKKAIDO体制」で民間企業、官公庁、教育機関などが連携してスタートした、次の社会・未来を創ろうとする人たちのための交流の場を提供する取り組みであり、本年は札幌市中心部の各所において、トークセッション、ライブ、交流会など様々なカテゴリーのイベントが開催されました。

^{*2} 「H-ARTs（ハーツ）」は、令和5年度から開始した、健康で持続可能な地域社会づくりへの貢献を目指し、本学、株式会社アークス、株式会社ラルズ、株式会社ツルハ及び札幌市で進めるウェルネス推進プロジェクトです。

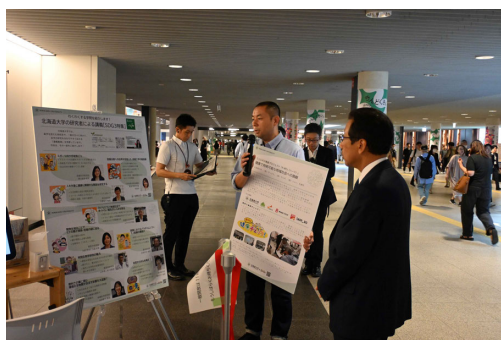
（サステナビリティ推進機構）



ブース出展の様子



脳年齢測定を体験する様子



初日に行われたリレーショナルツアーの様子
（写真右、秋元克広札幌市長）



脳年齢測定体験者にコメントを行う
保健科学研究院の小笠原克彦教授（写真右）

札幌市苗穂・本町地区センターと共催で「MIND食ランチョンセミナー」を実施

サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門は、札幌市苗穂・本町地区センターと共催で「MIND食ランチョンセミナー」を9月24日（火）に実施しました。本セミナーには、事前に申し込みを行った同地区の30名が参加しました。

セミナーは、はじめに北海道大学病院栄養管理部の熊谷聡美副部長から、同部の取り組みを紹介した後、脳の老化を遅らせるために開発された食事法である「MIND食」について説明しま

した。その後、参加者らは、インフォメーションセンター「エルムの森」で本学の食材を使用した特製メニューを提供している「カフェdeごはん」が本セミナー用に製作した「MIND食弁当」を、メニュー表・食材リストと照らし合わせながら実食しました。

最後に質疑応答の時間が設けられ、参加者からは実際に食べてみての感想の他に、「卵や豆腐（大豆）」といった食材は、MIND食ではどのように区分されているか」「今回の弁当は塩分・糖分・

カロリーはどのくらいか」といった質問が出され、熊谷副部長は、MIND食は「地中海式食」と、高血圧予防を目的とした「DASH（ダッシュ）食」を掛け合わせた食事法であり、必ずしも日本人の食生活にピッタリとマッチしてはいないものの、MIND食が推奨する10の食品・減量を勧める5の食品を参考にして、日頃の食生活の改善に役立てて欲しいと解説しました。

（サステナビリティ推進機構）



MIND食ランチョンセミナー実施の様子



講演を行う熊谷副部長



今回実食したMIND食弁当



食材リストを確認しながら実食する様子

雨龍研究林と札幌キャンパスがOECM国際データベースに登録

令和5年度に生物多様性の保全に貢献している区域として環境省から「自然共生サイト」に認定された北方生物圏フィールド科学センター雨龍研究林及び札幌キャンパスが8月に、国連環境計画世界自然保全モニタリングセンター（UNEP-WCMC）が管理する国際データベースにOECM（Other Effective area-based Conservation Measures）として登録されました。

我が国は、「生物多様性国家戦略2023-2030」において、生物多様性の損失を止め、反転させる「ネイチャーポジティブ」の実現に向け、30by30目標を掲げています。この目標を実現するために環境省では、民間の取り組みに

よって生物多様性の保全が図られている区域を「自然共生サイト」として認定しています。2023年度に認定された自然共生サイトのうち、保護地域との重複を除いた区域4.8万haが日本から初めてOECMとして国際データベースに登録されました。雨龍研究林と札幌キャンパスとで、その半分ほどを占めています。

今後も、世界課題の解決や地域への貢献に向け、知的資産と物的資産を活用し、30by30目標の達成への貢献はもちろん、生物多様性保全と気候変動対策の両立に向けたサステナビリティの推進に取り組めます。

●北海道大学雨龍研究林

Hokkaido University -

Uryu Experimental Forest

登録面積：24,170ha

（自然共生サイト認定区域のうち、保護地域（鳥獣保護区）との重複を除いた区域）

<https://www.protectedplanet.net/555781412>

●北海道大学札幌キャンパス

Hokkaido University - Sapporo Campus

登録面積：126ha

（自然共生サイト認定区域全域）

<https://www.protectedplanet.net/555781411>

（サステナビリティ推進機構、北方生物圏フィールド科学センター）



OECM認定のロゴマーク



「さっぽろレインボープライド2024」パレードに参加

9月15日（日）に行われた「さっぽろレインボープライド2024」パレードに、本学の学生及び教職員が参加しました。今回初の試みとなった同パレード参加は、令和4年に本学との包括連携協定を締結した日本航空株式会社（以下、JAL）からのご提案により実現したもので、ダイバーシティ・インクルージョン推進本部と社会共創部社会連携課が行った学内募集に応募いただいた18名とJAL社員の方々が合同チームとしてパレードを歩きました。

今回で24回目を迎える「さっぽろレインボープライド」（主催：さっぽろレインボープライド実行委員会）は、LGBTQなどの性的マイノリティの方々に対する差別の解消や性の多様性を認め合う社会の実現を目指し、毎年9月に開催されるイベントで、当事者の方々はもちろん、理解し支援する人（アラ

イ）が共に参加するものです。

今年のパレードには全体で1,000人以上が参加され、JALと本学は「パッションフロート」という一番初めに歩くグループに配置され、性的マイノリティへの理解促進に向けたメッセージが流れる先導車の後に続いて行進しました。

今回参加された方の中には初めてパレードを歩くという方も多く、周囲の方に倣って「ハッピープライド！」と元気な掛け声をかけあったり、沿道に向けて手を振るなどしながら札幌の街中を練り歩きました。沿道や道行く車中の方からは、パレードの行列に向けて温かい声援を送ってくださる方も多く、参加者からは「市民同士に一体感が生まれ、とても良い雰囲気のパレードだった」との感想が聞かれました。

当日は朝から降っていた雨もパレー

ド前には上がり、LGBTQプライドのシンボルであるレインボーカラーのフラッグが一層輝くパレードとなりました。

大通3丁目を出発し、大通公園、札幌時計台、赤レンガ庁舎、札幌駅前通りを巡る約3kmのコースを歩き終え、JALと本学の合同チームで写真撮影を行い終了しました。パレード参加を通じて学生同士の新たな交流にも繋がるなど、性的マイノリティへの理解とサポートの広がり共有する大変有意義な機会となりました。

北海道大学では今後も、LGBTQや性的マイノリティの方々への理解促進を進めてまいります。

（ダイバーシティ・インクルージョン推進本部）



参加者の集合写真



パレードの様子

知床・斜里町×北大まると交流祭を開催

広報・社会連携本部では、本学と自治体が連携し、地域の課題解決と活性化を目指す「自治体×北大まると交流祭」を令和6年度から開催しており、8月30日（金）に、世界自然遺産「知床」のまち、斜里町を本学に迎え、「知床・斜里町×北大まると交流祭」をオープンイノベーションハブ「エンレイソウ」（以下、エンレイソウ）にて開催しました。

会場では、8月26日（月）から斜里町を紹介するパネルや特産品などを展示し、当日は斜里町が取り組んでいる知床ブランディングのシンボルであるクマのキャラクター「知床トコさん」グッズのほか、斜里町の特産品などを販売する「しれとこマルシェ」、斜里

町の役場職員や地域で活躍されている方々と本学の学生や教職員が斜里町の魅力を語り合いながら交流する「知床・斜里町交流会」、斜里町の地域課題をテーマに斜里町と本学の研究や教育の連携の可能性について参加者を交えてディスカッションする「地域経営×大学リーダーゼミ」を実施しました。

しれとこマルシェは本学の教職員や観光客など多くの方で大変な賑わいとなり、知床・斜里町交流会には76名、地域経営×大学リーダーゼミには77名と多くの方に参加していただき、熱い議論が交わされました。

全体を通して、参加者からは「原生的な自然や農業の町だというイメージでしたが、素晴らしく先進的なまちづ

くりをしている町ということが分かった」、斜里町の方々からは「学生の方々の斜里町の認知度、地域づくりに関する熱量、大学の連携度合を知ることができた」といった声があり、斜里町との関係を深める一歩となりました。

今年度の自治体×北大まると交流祭は、10月11日（金）に東胆振地域1市4町（苫小牧市、白老町、厚真町、安平町及びむかわ町）を、10月25日（金）に北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林のある和歌山県古座川町を本学に迎えて開催します。

（広報・社会連携本部）



エンレイソウの展示の様子



しれとこマルシェの様子



知床・斜里町交流会の様子



地域経営×大学リーダーゼミでコメントする農学研究院の愛甲哲也教授（右から2人目）とメディア・コミュニケーション研究院の石黒侑介准教授（右端）

■ 部局ニュース

公共政策大学院が米国大使館助成プログラム「日米外交アカデミー」を開催

公共政策大学院（以下、HOPS）は、9月17日（火）から21日（土）の5日間にわたり「日米外交アカデミー」を開催しました。

本アカデミーは、日本の外交・安全保障上の課題に対処できる将来のリーダーを北日本在住大学生から養成するために米国国務省・米国大使館・在札幌米国総領事館の提供する助成プログラムの支援を受け、米国テネシー大学ベーカーズスクールとHOPSが共同で開催したものです。ベーカーズスクールの講師2名と本学の講師5名がメンターとなり、本学及び近隣他大学に所属する学部生・大学院生23名が、東アジアの安全保障や日米同盟についての双方向型の授業、戦略的コミュニケーションや政策ブリーフィング・ペーパーの書き方講座、自衛隊駐屯地や在札幌米国総領事館での研修、国際危機シミュレーション・ゲームに参加しました。なお本アカデミーは英語で開催されました。

1日目は開会式にてジェフ・フリーマン在札幌米国総領事館広報文化担当領事、山崎幹根公共政策大学院院長、そしてベーカーズスクール外交安全保障センター長のクリスタ・ウィーガンド教授からご挨拶をいただきました。続いてウィーガンド教授の「パワーポリティクス of 戦略的重要性」、土井翔平准教授（HOPS）の「日米同盟の重要性」、小浜祥子准教授（HOPS）の「国際関係における外交と交渉」、エリス・ヴラーシ講師（ベーカーズスクール上級研究員）の「日米同盟に対するハイブリッド戦の脅威」についての講義が行われました。参加学生は英語で積極的に質問し、国際関係や安全保障に関する基礎知識を身に付けました。

2日目はウィーガンド教授とヴラーシ講師から戦略的コミュニケーションや政策ブリーフィング・ペーパーの書き方についての講義を受けました。

3日目は外交・安全保障の実務の現場にて研修を行いました。まず岩谷將教授（HOPS）と共に陸上自衛隊真駒内駐屯地を訪問し、北部方面総監部防衛課長の松下卓也一等陸佐より、日本を取り巻く安全保障環境や自衛隊の果たしている役割及び直面している課題について、次いで在日米国陸軍連絡将校のアレックス・ユース少佐より日米同盟とその課題について、それぞれご講話をいただきました。また駐屯地内の食堂で喫食体験に参加し、自衛隊員の方々と意見交換を行いました。その後、在札幌米国総領事館を訪問し、マーク・ウェベルス米国総領事、フリーマン領事、マシュー・ハフナー経済担当領事から日米関係や外交官の仕事について講義を受けました。いずれの研

修においても講師の方々と参加学生の間で活発な質疑応答と意見交換が行われました。

4日目及び5日目は東アジアにおける国際危機のシナリオを用いた外交シミュレーション・ゲームが行われました。参加学生は池 直美教授（HOPS）、佐々田博教教授（メディア・コミュニケーション研究院）、ウィーガンド教授、ヴラーシ講師、小浜准教授らメンターの指導の下、シナリオの分析と政策分析を行い、首相に対するアドバイザーの立場から政策ブリーフィング・ペーパーの執筆及びプレゼンテーションを行いました。

本アカデミーへの参加を通じ、参加学生は日本の直面している安全保障問題や日米同盟の重要性についての理解を深め、政策立案能力や戦略的コミュニケーション能力を高めました。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）



1日目の集合写真



ウィーガンド教授の講義



在札幌米国総領事館における研修



グループワークの様様

医学研究院医理工学グローバルセンターが国際シンポジウム 「The 11th GCB Biomedical Science and Engineering Symposium」を開催

医学研究院医理工学グローバルセンターは、8月18日（日）に米国スタンフォード大学医学部放射線腫瘍学科と合同で第11回GCB国際シンポジウム（The 11th GCB Biomedical Science and Engineering Symposium）を医学部にて開催しました。昨年度に引き続き、現地会場とライブ配信を併用したハイブリッド形式により実施し、医理工学グローバルセンターの取り組みを世界に向けて発信しました。

今回は「放射線治療及び画像診断におけるAI」をメインテーマに、スタンフォード大学のみならず、米国MDアンダーソンがんセンター、台湾中国医薬大学、韓国ソウル大学等から世界の第一線で活躍する多彩な分野の研究者が集結し、医学物理、放射線治療、画像診断の多角的な視点から、最先端の

研究成果について発表が行われました。

本センター長の畠山鎮次教授による開会の挨拶で幕を開け、AI技術を導入した放射線治療システム、頭頸部癌の放射線治療戦略や臨床試験、画像診断から放射線治療につながるAIソリューション、AI支援による画質改善がもたらす診断能の向上等のトピックについて、国内外からの招待講演者10名と本学研究者2名による講演が横断的に行われました。各講演後には、次世代を担う新進気鋭な若手研究者から多くの質問が寄せられ、熱いディスカッションが繰り広げられました。最後に、副センター長の久下裕司教授による閉会の挨拶があり、全ての登壇者と参加者への感謝が述べられ、盛会の内に終了しました。

今回で11回目の開催となり、世界的

にも注目度の高いイベントとなりつつある本シンポジウムには、第9回日本台湾放射線腫瘍学シンポジウム（8月17日（土）、18日（日）午前開催）や、第3回北海道大学医療AIシンポジウム（8月17日（土）午後開催）の参加者も多数出席したため、国内と海外21カ国を含めた参加者は計253名（うち海外からの現地参加者49名）と、例年に劣らず国際色豊かなシンポジウムとなりました。本学の教職員、学生も多数参加し、国際交流を深めるとともに、今後の国際共同研究への新たな可能性が期待される良い機会となりました。今後も国際性を担保した研究開発と人材育成を行う研究拠点として、積極的に活動してまいります。

（医学研究院）



GCBシンポジウム集合写真

医学部・歯学部合同慰霊式を挙行

医学部及び歯学部では、9月30日（月）に、学術交流会館において、この1年間に系統解剖、病理解剖及び法医解剖のため、本学に尊い御遺体を捧げられ、その御遺体を通して病因・病態の究明に、あるいは人体構造機能の理解に、貴重な御教示を遺された497名の御霊の御冥福をお祈りするため、慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、御遺族、寶金清博総長、畠山鎮次医学部長、網塚憲生歯学部長、矢野理香保健科学研究院長、学外関係者、教職員、学生等約360名が参列しました。

式は解剖体御芳名奉読の後、参列者全員による黙祷を行い、次いで、畠山医学部長及び網塚歯学部長から、御霊の御意志に報いるためにも一層の教

育・研究・診療の発展に努めたい旨の追悼の辞がありました。その後、参列者による献花を行い、最後に網塚歯学部長から謝辞があり、慰霊式は厳粛のうちに終了しました。

（医学院・医学研究院・医学部、
歯学院・歯学研究院・歯学部）



追悼の辞を述べる畠山医学部長



追悼の辞を述べる網塚歯学部長



献花をする寶金総長



謝辞を述べる網塚歯学部長（左）及び畠山医学部長（右）

歯学部で台北医学大学歯学部生との交換留学を実施

9月2日（月）から9月6日（金）まで、台湾の台北医学大学の5年生が4名来学し、歯学部並びに北海道大学病院歯科を見学しました。この事業は、2018年の部局間交流協定の締結に基づく学生交流の一環として実施されました。初日には、先方のファン・チンユアン口腔外科准教授並びに網塚憲生歯学部部長らが今後の共同研究の進め方について討論しました。

受け入れプログラムの対応は、口腔顎顔面外科学教室が主体となって行われ、学生は北海道大学病院歯科で外来11診療科の診察や中央手術室を見学し、両国の疾患並びに治療の相違などについて学ぶ機会を得ました。9月4日（水）には歯学部生が主体となって交流会を企画し、双方の学生生活について発表の後、情報交換することで相互に理解を深めることができました。

また、同日には歯学部生2名が台北医学大学を訪問するなど、活発な相互交流が行われています。

両校は、今後も交流を継続していく予定であり、学術交流や学生交流が一層推進されることが期待されます。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



台北医学大学一行との記念撮影

工学部が創立100周年記念事業を挙行

工学部は令和6年9月に創立100周年を迎えたことを記念し、「SDGsオアシスオープニングセレモニー」、「工学部創立100周年記念式典・記念講演会・祝賀会」を挙行了しました。

(工学院・工学研究院・工学部)

○SDGsオアシスオープニングセレモニーを挙行

工学部フロンティア応用科学研究棟1階のセミナー室を改修し、7月にプレオープンしていた「SDGsオアシス」のオープニングセレモニーを9月17日（火）に挙行了しました。オープニングセレモニーは、幅崎浩樹工学部長の式辞に続き、前工学部長でSDGsオアシスの設計に携わった瀬戸口剛理事・副学長、宮永喜一工学部同窓会理事長から祝辞が述べられた後、瀬戸口理事・

副学長（前工学部長）、幅崎工学部長、泉典洋工学院院长、近野敦情報科学研究院長（副工学部長）、宮永工学部同窓会理事長によりテープカットが行われました。テープカットの後、約60名の教職員、学生等が出席して内覧会が行われ、各コースの展示等を見学し、コーヒーを飲みながら談笑するなどして、オープニングセレモニーは盛会のうちに終了しました。

SDGsオアシスは、工学部15コースの研究内容を紹介する映像、パネル、模型などを展示しており、スクリーンも設置されています。交流の場、工学部の研究内容を広く知ってもらう場、学生会議、講演会などのイベントとしての場等、多目的な活用が期待されています。



式辞を述べる幅崎工学部長



祝辞を述べる瀬戸口理事・副学長（前工学部長）



祝辞を述べる宮永工学部同窓会理事長



テープカットを行う（左から）近野情報科学研究院長（副工学部長）、幅崎工学部長、瀬戸口理事・副学長（前工学部長）、泉工学院院长、宮永工学部同窓会理事長

○工学部創立100周年記念式典・記念講演会・祝賀会を挙

9月27日（金）に京王プラザホテル札幌において、工学部創立100周年記念式典・記念講演会・祝賀会を挙行し、工学部同窓生、関係教職員等約300名が出席する中、工学部創立100周年が祝われました。

記念式典は、過去から現在の工学部を紹介するプロモーションビデオの上映で始まり、幅崎工学部長、宮永工学部同窓会理事長からの式辞、寶金清博総長の挨拶の後、真弓明彦北海道電力株式会社名誉顧問・北海道大学ほか

いどう同窓会会長、鈴木直道北海道知事（三橋 剛北海道副知事代読）、秋元克広札幌市長（ビデオレター）から祝辞が述べられました。



式辞を述べる幅崎工学部長



式辞を述べる宮永工学部同窓会理事長



挨拶を行う寶金総長



祝辞を述べる真弓北海道電力株式会社名誉顧問・北海道大学ほかいどう同窓会会長



祝辞を述べる三橋北海道副知事



秋元札幌市長からのビデオレター



会場の様子

引き続き行われた記念講演会では、本学経営協議会学外委員、日本大学常務理事、特定非営利活動法人ウッドデッキ代表理事である渡辺美代子氏から「工学をめぐる多様性」と題し、工学

分野におけるあらゆる力を活用した多様性（ジェンダー考慮）の推進の重要性について講演が行われ、引き続き、松田瑞史室蘭工業大学学長から「北大工学部への期待（OBで同業者から）」

と題し、教育研究の推進、北海道地域産業の振興、発展に関する期待について講演が行われました。



講演する渡辺氏



講演する松田室蘭工業大学学長

記念講演会終了後、会場を移して行われた祝賀会では、幅崎工学部長、瀬戸口理事・副学長（前工学部長）からの挨拶の後、寶金総長、渡辺氏、佐伯浩元総長（名誉教授、元工学部長）、宮永工学部同窓会理事長、幅崎工学部長、松田室蘭工業大学学長、大槻 博北海道ガス株式会社会長、真弓北海道電力株式会社名誉顧問、榮坂俊雄北見工業大学学長、岡部和憲一般財団法人北海道河川財団会長、土岐祥介名誉教

授（元工学部長）、三上 隆旭川市立大学学長（元工学部長）、瀬戸口理事・副学長（前工学部長）、深田真衣さん（工学院博士後期課程3年）、外ノ池真志北海道大学応援団団長（工学部2年）による鏡開きが行われ、佐伯元総長（元工学部長）による祝杯により祝宴が始まりました。和やかな雰囲気の中、大槻北海道ガス株式会社会長、榮坂北見工業大学学長、齋藤智久株式会社メカノクロス代表取締役からの祝

辞、渡部典大助教から100周年記念事業の取り組みの一つである「ヴァーチャル工学部」が披露されました。会の結びには、近野情報科学研究院長（副工学部長）の乾杯に引き続き、「都ぞ弥生」を出席者全員で斉唱し、盛況のうちに閉宴しました。

工学部はこの記念事業を新たな幕開けとし、次の100年に向け、研究・教育のより一層の発展と、社会への更なる貢献を目指して邁進していきます。



挨拶する瀬戸口理事・副学長（前工学部長）



鏡開きの様子



祝杯を行う佐伯元総長（元工学部長）



祝辞を述べる大槻北海道ガス株式会社会長



祝辞を述べる榮坂北見工業大学学長



祝辞を述べる齋藤株式会社メカノクロス代表取締役



ヴァーチャル工学部の紹介を行う渡部助教



乾杯を行う近野情報科学研究院長（副工学部長）



前口上を行う外ノ池北海道大学応援団団長（工学部2年）



会場の様子



出席者による記念撮影

農学部において第41回 あぐり大学 「わたしたちのくらしと酵（こう）素」を開催

農学部において、9月7日（土）にあぐり大学を開催しました。あぐり大学は、農学部と北海道新聞編集局が2014年度から共同で行っている連続親子講座で、「食と農」について、頭と体を使って学ぶ体験的講座です（農学同窓会後援）。農学部の複数の学科から、学生もスタッフとして参加しています。

第41回となる今回は、「わたしたちのくらしと酵（こう）素」のタイトルで、奥山正幸教授（分子酵素学）にあぐり博士を、田上貴祥准教授に「影のあぐり博士」をご担当いただきました。

「酵素」と聞くと、皆様はどんなことをイメージするでしょうか？世の中では健康食品としての酵素が有名ですが、実は酵素は生物が生命活動を維持するために必要です。そして、私たちの生活をうるおすためにも様々に利用されています。今回は、初めに「ご飯をよく噛んで食べると甘くなる」ことを参加者に体験してもらい、そのときに口の中で起こっていること、「酵素の働きでデンプンが分解されてブドウ糖ができる」ことについてクイズを交えながらあぐり博士から解説がありま

した。続いてあぐり博士の解説を実際
に実験によって確かめました。最後に、目には見えない酵素を大学ではどのように見ているのか、大きさや形について、少し難しい内容にも踏み込み、あぐり博士が詳しく説明しました。

参加者の子どもたちがあぐり博士に積極的に質問する場面も多くあり、「楽しかった！」との声が多く聞かれ、イベントは盛況のうちに終了しました。

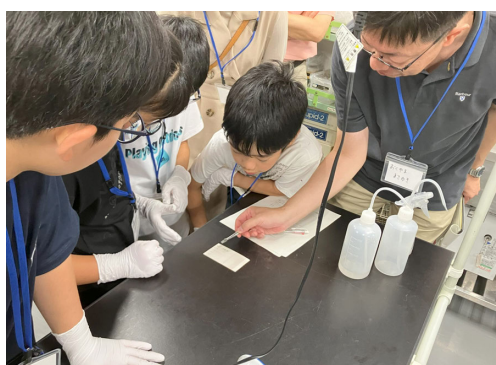
（農学部）



あぐり博士（奥山教授）の説明を聞く親子



「口の中でご飯が甘くなった」ときの酵素の働きを実験で確かめる受講生1



「口の中でご飯が甘くなった」ときの酵素の働きを実験で確かめる受講生2

地球環境科学研究院が令和6年度公開講座 「生物学の技術と挑戦：環境問題の解決への糸口」を実施

地球環境科学研究院は、令和6年度公開講座「生物学の技術と挑戦：環境問題の解決への糸口」全5回を8月27日（火）から9月24日（火）まで、対面・オンラインのハイブリッドにて開講し、10代から80代までの50名が受講しました。

気候変動や環境汚染などの環境問題には生物学的な現象が関係しています。生物学は、それ自体は生命現象を明らかにすることを目的としていますが、その解明を目指す試みを通じて、

環境問題の解決につながる糸口をもたらす場合があります。本講座では、地球環境科学研究院と、連携して教育に参画している環境科学院に所属する計5名の教員が、それぞれの専門性を活かして、研究の最前線を分かりやすく紹介しました。

「気候と森林：地理的分布と気候変動の影響（第1回）」「絶滅危惧植物の保全と植物園の役割（第2回）」「光環境適応から考える藻類から陸上植物への進化と地球環境の変遷（第3回）」

「繰り返される森林火災と乗り越えてきた野生動物の暮らし（第4回）」「二酸化炭素の吸収の場として注目される沿岸海域の役割（第5回）」というそれぞれの課題についての講義に続き、受講者からの質問に答える形で活発な議論が行われ、全5回の講義のうち3回以上に出席した34人の受講者に修了証書が授与されました。

（地球環境科学研究院）



谷本陽一研究院長による挨拶



講義の様子

北海道大学研究集会2024「言語教育におけるAI活用の展望と教師の果たす役割ーAIにできること、できないこと」を開催

メディア・コミュニケーション研究院及び外国語教育センターは8月26日（月）と27日（火）に高等教育推進機構にて北海道大学研究集会2024「言語教育におけるAI活用の展望と教師の果たす役割ーAIにできること、できないこと」を開催しました。本研究集会の開催趣旨は、言語教育におけるAIを活用した授業実践、学生のAI使用の現

状、最新の研究の知見について参加者と情報を共有すること、そして今後のAI活用の展望と教師が果たす役割について議論を深めることでした。

2日間で6件の講演と2件のワークショップ、さらに講演者によるパネルディスカッションを行いました。現在の言語教育において時宜にかなったテーマであることから関心も高く、全国から

約130名の参加者が集う会となりました。言語や専門分野の枠を超え、さらに教員だけでなく多くの学生も参加し、活発な意見交換を行う大変有意義な機会となりました。

（メディア・コミュニケーション研究院、外国語教育センター）

開催概要

- | | |
|----------|---|
| 8月26日（月） | <p>「対話と身体性ー大規模言語モデルにできることとできないこと」
田中彰吾（東海大学 教授）</p> <p>「北大生の第二外国語学習におけるAI活用の現状」
堀 晋也（メディア・コミュニケーション研究院 助教）</p> <p>「iPad Café in Hokkaido」
岩居弘樹（大阪大学 教授）、岩根 久（大阪大学 招へい教員）、大前智美（大阪大学 准教授）</p> |
| 8月27日（火） | <p>「生成AIとのビジュアルコミュニケーションから外国語教育デザインの要素を考える」
杉江聡子（北海学園大学 准教授）、田邊 鉄（情報基盤センター 准教授）</p> <p>「理解可能なインプットを引き出すには：生成AIを利用した英語ライティング活動の実践と課題」
小田登志子（東京経済大学 准教授）</p> <p>「英語教育における生成AI活用の現状と展望ー言語習得理論と技術革新の統合に向けて」
水本 篤（関西大学 教授）</p> <p>「デジタルツール・生成AIを使った外国語学教育の可能性：アプリ開発者の視点から」
杉山滉平（立命館大学 大学院生）</p> <p>「外国語教育でAIを用いることに必然性はあるのか」
大木 充（京都大学 名誉教授）</p> |

メディア・コミュニケーション研究院で 「北海道におけるロシア語教育」研究会を開催

メディア・コミュニケーション研究院は9月7日（土）、9月8日（日）に学術交流会館にて「北海道におけるロシア語教育：歴史と現状」研究会・ワークショップを開催しました。

本イベントの開催は、本学が道内におけるロシア語教育の中核的な役割を担うことを目的とした活動の一環で、本学をはじめ、ロシア極東連邦総合大学函館校、北海学園大学、札幌大学、札幌医科大学の教員・研究者及び北海道札幌国際情報高等学校の教員が道内のロシア語教育の歴史、教育及び研究活動、国際交流、教材開発について報告しました。また、道内の大学以外に、立教大学、慶應義塾大学、北海道札幌丘珠高等学校からもオンラインでの参加がありました。

9月7日（土）の前半には、函館におけるロシア語教育の特徴、ロシア語教育の歴史と需要の変遷、バイリンガル子ども向けのロシア語教育（札幌市と

安山市の比較分析）、ロシア語教育におけるデータ駆動型学習、コミュニケーション・アプローチのロシア語教科書作成に関する研究発表が行われました。続いて後半には、第二外国語としてのロシア語教育の現状と課題、ロシア語文法教授法、プレゼンテーション交換を通しての文化理解（ロシア語教材紹介）、北海学園大学におけるロシア語教育の取り組みについての実践発表が行われ、その後のディスカッションでは、道内のロシア語教育を支えるためのネットワークを構築する必要性が指摘されました。

9月8日（日）には、学生向けのイベント「学生フォーラム」及びワークショップを行いました。午前に行われた「学生フォーラム」では、学生によるロシア語教育に関わる学生活動の報告の後、他大学の学生とともにグループに分かれ、「高校でのロシア語教育の必要性」や「現在のロシア語教育に足り

ないもの」など、学生が提起したテーマについてディスカッションを行いました。午後のセッションでは、学生がチェブラーシカの歌で学ぶロシア語の格変化、本学オープンエデュケーションセンターで開発された教材によるロシア語の発音・イントネーションの練習、内容統合型学習（CLIL）によるロシア文化の授業、キルギスからの高校生受け入れについてのワークショップ・報告及び質疑応答が行われました。

本イベントに参加した学生からは、道内の大学でロシア語を教える教員の取り組みを知ったり、ロシア語を学ぶ日本人学生同士、あるいはロシアやアルメニアからの留学生との交流の場が得られる機会となったといった声がありました。

（メディア・コミュニケーション研究院）



研究会セッション



グループディスカッション（学生フォーラム）

遺伝子病制御研究所に宇宙航空研究開発機構（JAXA）の大西卓哉宇宙飛行士が来訪

8月27日（火）、遺伝子病制御研究所に、同研究所のがん制御学分野（園下将大教授）と共同研究を実施している宇宙航空研究開発機構（JAXA）の大西卓哉宇宙飛行士が来訪しました。

これは、令和7年2月以降に大西飛行士が国際宇宙ステーション（以下、ISS）「きぼう」日本実験棟にクルーとして滞在し、同分野との実験を実施する可能性が高まってきたことから、実験の背景や意義、手技をより深く理解するために今回の訪問が実現したものです。

大西飛行士は、園下教授による打ち上げ実験の背景や意義、ISSにおける実験手技の説明に熱心に耳を傾け、疑似微小重力発生装置やショウジョウバエ飼育設備を見学しました。ショウジョウバエを顕微鏡で観察した際には、興味深く見入っている場面もありました。

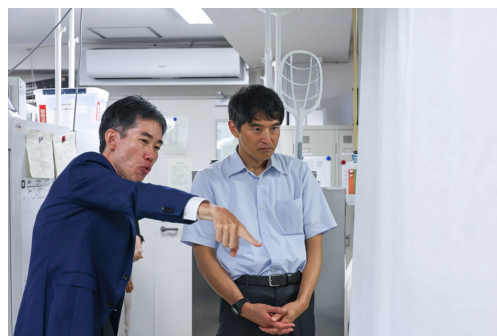
続いて行った意見交換会では、大西飛行士は宇宙に関心のある本学教員や大学院生約40名を前に、宇宙飛行士になるまでの経緯や訓練内容、ISSでの業務内容、宇宙における研究開発の今後の展望などについて語りました。

参加者からは、ISS滞在時の人体への様々な影響、宇宙飛行士になるために必要な心構えや準備、ISSでの娯楽に関することなど多岐にわたる質問が寄せられ、それらに予定時間を超えて丁寧に答えてくれました。最後に、大西飛行士は「医学や生物学の研究は宇宙を開拓していく上でも重要なもの。ぜひ研究に真摯に取り組んでほしい」と参加者にエールを送り、意見交換会は盛会のうちに終了しました。

（遺伝子病制御研究所）



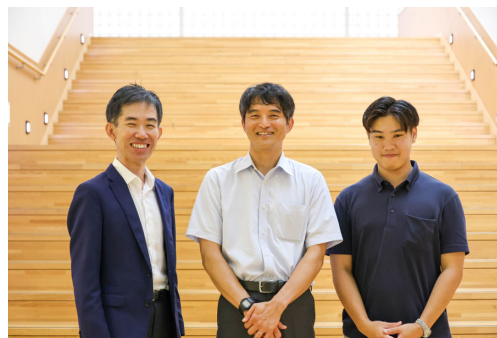
実験の説明を受ける大西飛行士（右）



実験室の案内を受ける大西飛行士（右）



意見交換会にて参加者からの質問に答える大西飛行士



左から園下教授、大西飛行士、医学院生の平田大賀さん

遺伝子病制御研究所が動物慰霊式を挙行

9月25日（水）、遺伝子病制御研究所において、昨年10月からの約1年間に学術研究の礎として実験に供せられた動物の御霊を慰霊するため、動物慰霊式を執り行いました。

今年度も昨年度と同様、挨拶をメール配信にて行い、献花を各自行っていただく形式で執り行いました。献花に

は研究所教職員、大学院生等の関係者が参列しました。

また、配信された挨拶では、村上正晃所長から、生命の尊さを常に考え、動物福祉に一層配慮した研究態勢を考えていくことを願う旨の挨拶がありました。また、清野研一郎動物実験施設長からは、動物の命へ感謝を述べる旨

の挨拶がありました。

この動物慰霊式を通して、参列者全員が生命の尊厳、倫理観について改めて認識し、厳粛のうちに慰霊式を終了しました。

（遺伝子病制御研究所）



献花を行う村上所長



献花を行う清野施設長

日・ザンビア外交関係樹立60周年記念 人獣共通感染症対策のためのOne Health特別シンポジウムを開催

人獣共通感染症国際共同研究所は、9月6日（金）、獣医学研究院にて「日・ザンビア外交関係樹立60周年記念 人獣共通感染症対策のためのOne Health特別シンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムでは、共同研究先であるザンビア国立公衆衛生研究所（ZNPHI）のローマ チレンギ所長、レイモンド ハモンガ氏、コッパーベルト大学のバーナード ハンゴンベ副学長、ザンビア大学獣医学部（UNZA-Vet）のヴィクター ズル学部長代理、カテンディ チャングラ講師を招へいし、ザンビアの公衆衛生において重要な役割を果たす各機関の紹介、ザンビアで発生

したコレラや炭疽のアウトブレイクへの対応、マールブルグウイルスの研究、人獣共通感染症対策のためのパートナーシップについての情報が共有されました。

本学とザンビア大学は、1983年にUNZA-Vetが開校されて以来長年にわたり共同研究や人材育成などの交流を続け、2007年にはUNZA-Vet内に本研究所の研究拠点「Hokudai Center for Zoonosis Control in Zambia (HUCZCZ)」が設立されました。その後、2023年には、本研究所とUNZA-VetとZNPHIの3者間の共同研究に関する覚書を締結し、連携が強化されています。

本シンポジウムは、ザンビアにおける人獣共通感染症対策の協力関係の過去と現在を振り返る機会、そして今後の両国の各分野の連携強化による人獣共通感染症対策への取り組みが期待されるものとなりました。

招へい者一行は、本シンポジウムの他に、寶金清博総長の表敬訪問や、本研究所及び創成研究機構ワクチン研究開発拠点の研究施設の見学、及び札幌市保健所への訪問や、教職員及びザンビア人留学生との懇親会などに参加し、交流を深めました。

（人獣共通感染症国際共同研究所）



シンポジウムのポスター



質疑に答えるチレンギ所長（右奥）と
ワクチン研究開発拠点の澤 洋文教授（左奥）



シンポジウム後の記念撮影

第46回なよろ産業まつりへ参加

8月25日（日）に名寄市の浅江島公園で、なよろ産業まつり実行委員会主催の「第46回なよろ産業まつり」が開催され、北方生物圏フィールド科学センター北管理部が参加しました。産業まつりでは、北管理部はバードコールづくりと薪割り体験を実施しました。

バードコールづくりは、小学生を中心に55名が参加しました。参加者はお

気に入りの枝を選び、枝をノコギリで切る等、熱心に作成していました。完成すると、早速バードコールを鳴らし、鳥のさえずりに似た音を楽しんでいました。

薪割り体験は、大人から子供まで、多くの方が参加しました。大人は斧を、子供は小さな斧を使います。「よいしょ」の掛け声とともに、力いっぱい

薪割りをしました。うまく薪が割れると、歓声が湧きました。

バードコールづくり、薪割り体験ともに、参加者に楽しんでもいただきました。今後もイベントに参加して、北管理部の魅力を発信していきます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



スタッフと一緒にバードコールの材料をノコギリで切る参加者



完成したバードコール



薪割り体験

北極域研究センターが国立大学附置研究所・センター会議 第1部会シンポジウムを開催

北極域研究センターは9月3日（火）、国立大学附置研究所・センター会議第1部会との共催で、国立大学附置研究所・センター会議 第1部会シンポジウムを開催しました。

国立大学附置研究所・センター会議は、全国の国立大学法人に設置された附置研究所及び研究センターの所長・センター長が相互に緊密な連絡と協力を行うことにより、わが国の学術研究の振興を図ることを目的とした組織で、会議内に置かれた3つの部会がそれぞれ研究成果の紹介や関連研究分野での情報交換等を目的としたシンポジウムを毎年度開催しています。このうち、令和6年度の第1部会シンポジウムは、本センターが当番を務め、「SDGs×課題解決型研究～北極域での実践を中心に～」をテーマとして開催しました。

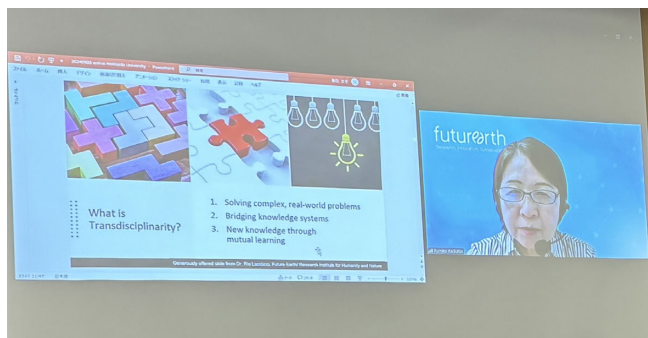
シンポジウムでは、本センターの教員を含む学内外4名の研究者による講演を設け、SDGsの達成を目指した課題解決型研究の取り組みについて、それぞれの立場から現状と展望が語られました。

はじめに、瀬戸口剛理事・副学長による開会挨拶があり、その後、Future Earth国際事務局日本ハブ事務局長を務める、長崎大学グローバルリスク研究センター副センター長の春日文子教授から、「地球環境と社会の課題解決を目指して～Future Earthにおける超学際研究の取組み」と題した講演がありました。次いで、サステナビリティ推進機構の加藤 悟教授から、「世界の課題解決（SDGs達成）に貢献する北海道大学」と題して、本学のビジョン・戦略に基づく持続可能な社会の実

現に資する取り組みについて語られました。その後、本センターの平田貴文特任准教授、ユハ・サウナワラ准教授から、それぞれ「北極海における海洋生態系の脆弱性評価」「北極域・北方圏の地域開発におけるGXとDX」をテーマに、本センターにおける実践例の紹介があり、最後に、国立大学附置研究所・センター会議第1部会長を務める、東京大学地震研究所長の古村孝志教授による閉会挨拶がありました。

本シンポジウムはオンライン開催で、大学関係者を中心に道内外から104名が参加し、SDGsや持続可能な社会の実現という地球規模の課題に対して、課題解決型研究のさらなる進展が期待されるものとなりました。

（北極域研究センター）



春日教授による講演



サウナワラ准教授による実践例の紹介

■お知らせ

医療費通知事業の実施

国家公務員共済組合法附則第14条の3第1項に基づく国家公務員共済組合連合会の共同事業の一つとして、昭和56年度から実施している医療費の通知事業を今年も行うことになりました。

この通知事業は、組合員に対し医療費の額等を通知することにより、組合員等に健康に対する認識を深めていただき、ひいては、短期給付事業の健全な運営に資することを目的として、特定月における支払分について通知するものです。

実施内容は次のとおりです。

1. 通知の対象

組合員及びその被扶養者に係る令和6年6月診療分の診療報酬明細書（レセプト）による医療費の額等です。

なお、共済組合の直営医療機関並びに契約医療機関に係る請求分、任意継続組合員、遠隔地被扶養者及び在外組合員に係る請求分、特定の診療部門に係る請求分は通知の対象から除外されます。

2. 通知の内容

通知の内容は、受診者名、診療年月、診療日数、入院・通院・歯科・薬局の別、医療費の額及び病院名です。

3. 通知票の組合員への配付

通知票の組合員への配付は、令和6年11月末頃までに各部局等の共済事務担当係から行われる予定です。

（文部科学省共済組合北海道大学支部）

編集メモ

- 9月6日（金）、旧昆虫学及養蚕学教室をリノベーションした北海道ワイン教育研究センター棟の一般開放が始まりました。

北海道産ワインを有料で試飲できる「北大ワインテイスティング・ラボ」を設置し、受付で1,500円を支払うとコイン3枚とグラスが渡され、コイン1枚につき1種類のワインを飲むことができます。

北海道産ワインと、歴史的建造物の魅力を味わうことができますので、是非お試しください。



裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は桑園学寮記念碑です。

かつて、この地には桑園学寮という学生寮がありました。碑文によると、昭和58年に廃寮となるまで、計512名の学生が暮らしたそうです。

時代は刻々と移ろいますが、キャンパスに溢れる学生たちの活気は今も昔も変わりません。

キャンパス風景 55 桑園学寮記念碑（北8条西9丁目）



北大時報 ⑩ No.847 令和6年10月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>